

---

# モブ子がゆく。

蜂亀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モブ子がゆく。

### 【Nコード】

N3060Z

### 【作者名】

蜂亀

### 【あらすじ】

このお話は原作として型月制作Fateシリーズを舞台に、Fateの平行世界へオリジナル主人公がなるべく目立たないように生活したくて冬木市を出たいけどはた迷惑な虎聖杯が3度目の復活を果たしたせいでそこから逃げられないため泣く泣く自分を保護してくれた夫婦と一緒に冬木市に住んでますという話。冬木市に溢れる虎柄の奇妙なアイテムグッズ、突き刺さる名も無きモブ達からの悪意ある視線。ああ、早く帰りたい。それだつてのに一番の敵はこちらを期待のオーラぶんぶんで見つめる(?)煌めく魔法少

女ステッキ。 … ああ、早く現実世界に帰りたい。 世界やモブからも避けられ、現実世界からも除かれ”あまり”になった少女の願いは聖杯へと届くのか…？ 注意 タイころの明るさ目一杯のつもりでどんより暗く沈んだ成分が大量に含まれています。そして時々原作キャラクターが空気になります。

基本的に他作品に関わりが無いつもりですが、オリキャラ陣営に他作品の似て非なる名前を持つキャラクターが顔を出しますのでご了承ください。

## 登場しない娘の二日間（前書き）

御アクセスいただき誠にありがとうございます。

一時創作どうしたんだといわれますと、そちらの息抜きで書いてたら  
ヒートアップしてしまいました。誠にすみません。

相変わらず二次をやっても堅物文章ですね。

何とかならない物かしら（．．．）

## 登場しない娘の二日間

「衛宮くんはモテモテなんですねー」

「急にどうしたんだよ突鎧（とつがい）。」

「いえ、ただなんとなく言ってみたかったですよー」

その日穂群原学園の校庭隅で衛宮士郎は一年二年合同の体育授業で組んだ相手の女子、

突鎧天利（とつがいあまり）といた。

確か二年B組の子だと思うが、あんまり彼女のことは知らないのでもほとんど会話

もしたことがない同じ学年の顔見知りの人間だろう。

「衛宮くん。」

「ああ、何だ？」

「ごめんなさいね。せっかく一緒に組んだのに文字通り足を引っぱってしまつて。」

「いいんだよ。あれは突鎧のせいじゃないだろ？」

突鎧という女子と組んだ士郎は体育授業で協力しながら学校でやっているのかわからない

謎の授業で二人三脚やら高飛びやらバドミントンダブルス戦など他の参加者達と競い合った。

主人公補正やら我慢強さやらそういう物を持ち合わせている士郎な

ら戸惑いはあれどこなせる競技だが、

生憎今日のパートナーは普通のお嬢さんだ。

テスト中に幾度となく降りかかる火の粉（士郎に敵対心を燃やすどころの誰かさんとか

組めなかったから悔しさとかそんな）を振り払うのは普通の人には至難の業であり

（というか巻き込まれて離脱するのが普通）、

一時休憩が終わった後のバトンリレーで突鎧が盛大にずっこけて士郎の足を引っ張り

共倒れしてしまった。そのとき突鎧から鈍い音が聞こえたのは間違いでなかったと

その現場を間近で目撃した匿名希望のワカメは言う。

5

「……………」

「と、とりあえず、応急処置はさ保健の先生がやってくれたしさ、そう気を病むなよ。」

「そうですねそういうことにおきますよー」

しよんぼりしたのか口をつぐむ突鎧に士郎はつい元気づけようと笑うと、突鎧も

含みのある言い方ではあれど、笑みを返した。

さて、そろそろこの二学年合同体育授業も終了時間に近づいて結果発表となった

ところで休む二人に近づく生徒が現れた。

「衛宮！」

「一成？」

士郎は名前を呼ばれたのでそちらに視線を向けるとその相手は少し汗を掻いて立っていた

彼は士郎の友人である穂群原学園の生徒会長柳同一成その人だった。

「テストの結果発表だろ？なんでこっちに？」

「ああ、すまない。先生がお前を呼んでこいと言うのでなここへ来た次第だ。」

なんでも、授業結果のトップにお前が含まれてるそうだ。」

「へえー衛宮くんやっぱりすごいですねー」

一成に腕を引かれて立ち上がった士郎は感心した声を上げた突鎧の方を振り返ると、彼女の

目線とぶつかつた。突鎧はにこにこしたままだがその顔には「生徒会長と行かないのですか？」と

浮かんでいるように見えたのは気のせいか。

「や、すまないな突鎧。君もいたんだつたな。」

「なあ一成、突鎧の怪我のこともあるしさ

「いいんですよー。わたしのことなんて。」

士郎の目線を追ってやっと同行者の存在に気がついた一成は、ばつ

が悪そうに謝罪する。

わざわざこちらに自分が来たのは怪我人について行った士郎を呼びにだと思ひ出したからだ。

そうすると怪我人を放置できない士郎は一成に放っておけないと言おうとして口を開くとまるで遮るような発言が割り込んだのでその相手を見た。

振り向いた彼女はにこにこした笑顔のまま。

「ほら、せっかく呼ばれたんだから行かなきゃ駄目ですよー衛宮くん。」

「いや、そんなこと出来るわけ」

「いいんですよー衛宮くんは先生に呼ばれているんでしょっ？じゃあ早く行かないと怒られます。」

笑顔を崩さず彼女は言う。声を掛けられた一成は「すまん。」と突鎧に頭（こつべ）を垂れた。

しかし二人に挟まれた士郎は納得がいかない顔だったが、

「…納得いかなさそうなので、言い方を変えますねー。衛宮くん、お願いします。」

先生きつと待つてると思ひますし。」

有無を言わせない某あかいあくまの笑顔とも儂げな微笑みをたたえる某一年生とも、

はたまた嬉しそうに食事を食べる自宅でお留守番している同居人の笑顔とも違う

普通の笑顔に士郎は”お願い”されてしまったのでこちらに来てくれた一成に促されて

体育の先生と学年のみんなの元へ走っていった。

「所詮わたしのことなんていいのです。」

遠くへ行く二人の背中を眺めて突鎧天利はその先の彼方へ呟いた。  
ひとつひとつの言葉を噛みしめるように、繰り返す。

「わたしはただの登場もしない人間ですから、わたしのことなんていいのです。」

自分の隣には誰もいない校庭の片隅で。

## 登場しない娘の二日間（後書き）

あくまでも女オリジナル主人公の突鎧さんは舞台上には上がりたくないようです。

キーワードのシリアルは「シリアス+コミカル」の方程式（？）で成り立ってるんだと

勝手に解釈して使ってますのでご了承ください。

**登場しない娘の二日間2（前書き）**

先に謝ります。

Fateキャラが空気である

穂群原学園2年B組が名も無きモブキャラたちの巣窟に。

## 登場しない娘の二日間2

【ジャプニカ異録日記帳：始】

拝啓、おとうさま、おかあさま、

わたしの大事な破天荒なおにいさま、小憎たらくも愛しいいもうとへ。

日々の生活はどうですか？お変わり有りませんか？

わたしがいなくなってしまっってからどんなことをしていますか？

突然一人でこちらへ来てからわたしは不安でしょうがないのですが、おじいさまとおばあさまの好意で通わせていただいている学園での日々を暮らしています。

今日はちよつと大変な体育のテストがあり、わたしの失態で足を挫いてしまいました。

でもそれ以外は変わりない生活で、……わたしは早く皆がいる家に帰りたいです。

どうしてわたしはこのような場所に飛ばされたのでしょうか？

未だに謎が謎を呼ぶあのときがわたしには忘れられません。

もしもあのとき飛ばされた時間がその場で止まっていれば皆心配しなくてよいのですが。

とにかく何事もないよう、わたしは心から皆さまの無事を祈ります。

【ジャプニカ異録日記帳：終】

\*\*\*

突然だが、

【突鎧天利は名前は文字がなんか普通じゃないが、ただ名前を与えられただけのモブキャラクターである。】

と彼女自身常々考えている。何故そう思うのかといえば、彼女はこの穂群原学園が

ゲームの中に存在する架空の場所でその学園が存在するこの冬木市だつてやはり架空都市だと。

突鎧天利いや冬木市に飛ばされる前は家族に「天ちゃん」と呼ばれていた少女は覚えている。

なんてつたつてこんな場所に来る前の彼女はこの世界の元となるゲームを遊んでいたのだから。

「とりあえずクリアーして寝たら公園にいましたーですよ。どういうことですかこれは。」

思い出すだけでも理解不能なその出来事。

Fate/stay night (PS2版)を緩い速度でクリアしてやったー終わったーと布団にダイブ。

そして身体を揺さぶられてなんだと目を開けると、心配そうな顔でこちらを見下ろす見知らぬ老夫婦がいて、

彼女自身は冬の服装で公園ベンチで寝ていた。確か、布団にダイブしたときは黄色い

パジャマと青のナイトキャップを身につけていたのだが、それは背

負っていたリユックの  
中に綺麗に畳まれて入っていた。

「わたしはチキンですからR指定とか恥ずかしくてーできないから  
PS2版買ったんですよ…！」

”こちら”に来たときのことを思い出しているのか天利は拳を握り  
しめる。

自分の信念？というか融通の利かなさに引つかかってしまったその  
ゲームが悪いとは

思っていない彼女だがその性格が駄目だったなんて言われたら日には  
多分…いや絶対に彼女はしよげかえる自信すらある。

「はあ…今さら考えたって仕方ないですね…」

ともかくにも、この突鎧天利は現実からゲームの中の名前の付い  
たモブキャラとして

Fate/stay nightの中に…いや、

自分が知っているゲームよりも殺伐とした空気も、どこか恐ろしい  
存在も

モブキャラクターだから分からないのかもしれないが学園に通う日  
々に何ら違和感はない。

強いて言えば生徒の持ち物に、少々センスの悪い虎柄のアイテムが  
そこかしこにあったり、

学園の道すがらやはりどこか虎っぽい何かがある…それくらいか。

(まだ遊んだことない、けど、タイころみたいな世界なのかしら。)  
自分以外は誰もいない部屋で天利は悩んだ。考えの中で思い出される某ゲームタイトルにはわりとおもしろおかしく話が進むといううたい文句があったはずで、なんとなくそれっぽい。

実はこう悩むまでもに何度か冬木市から抜けだそうという時もあったが、大体いつのまにかそれが出来なくなっているんだから原作知識でいうところの大きな結果が彼女の行く手を阻んでいるんだろう。

ただの名も無き一般人だったら苦もなく抜けだしてただろうが。

「名前が無くて冬木から逃げようなんて考えたら余計逃げられないんでしょね…」

考えているだけでは溜まっていくストレスをどこかに逃がしたくなつた彼女は重苦しいため息をまた一つはき出した。

ふと部屋の時計を見るともうすぐ深夜二時だ。このまま起きているのは不味い。不満はいつまでも胸の中に残って息苦しいが天利はささっと着替えてやっと眠り慣れた

ベッドに身を沈めた。

\*\*\*

穂群原学園2年B組教室前

「ごめんなさい、突鎧さんは今日来てるかしら？」

「あら、遠坂さん。突鎧さんなら昨日の怪我で今日はお休みしてま  
すよ。」

「そうなの？残念ね。」

翌日の昼。案の定夜更かししたせいで突鎧天利はそのまま学校を休  
む羽目に。

そんな事人に聞かねば知らない2年A組の教室から抜け出して天利  
を見に来た遠坂凜は  
残念だなど肩を竦ませてB組の教室を後にするしかなかった。

彼女は何のために、突鎧天利に会いに来たのだろうかと呼び止めら  
れたB組の女子生徒は

訝しむが、きつと”遠坂さんに失礼なことでもしたんだわ”なんて  
いう考えに至り、記憶から

そんな出来事を忘れ去ったなんて凜や昨日の面子が知ったらどう思  
うだろう？

けれどB組は同じ事があれば十回あれば十人が十人同じ事をする。

A組C組それぞれのクラスメートは仲がいいというのに、何故かB組は突鎧天利だけを

除いてまことに他人へ対して冷たい教室だった。

## 登場しない娘の二日間2（後書き）

次回は突鎧さん家の老夫婦が登場します。

オリジナル陣営の最初の他作品登場人物名パロディ被害者だったりします。

## 登場しない娘の二日間③（前書き）

今回もFateキャラが空気です。

マジカルルビーちゃんが強化？されて帰ってきました。

### 登場しない娘の二日間3

キーンコーン カーンコーン

凜が2年B組を訪れた日の夕暮れ、またB組に訪問者が現れた。

「なあ、突鎧とかまだいるか？」

「ん？あまりは今日休みだぜ。」

「そうか。悪い邪魔したな。」

今度は穂群原のブラウニーこと衛宮士郎だった。B組に残っていた数人が揃ってため息をつく。

士郎はそんな彼らに首をかしげるが、それ以上の用は無かったので素直に帰ろうと踵を返して

「なんで”あまりもの”のあいっにお呼びがかかるんだ？」

「シラネ。どうせ昨日気を引きたくて怪我をしたってところがお人好しの餌になったんだろ」

「あーそれっぽーい！ホントむかつくよね。何様のつもりなのかしらあの余りは」

「”ナマエ”があるだけでもむかつくのになー。」

そんな話を耳に挟んだ。身体の向きを変える前にちらりと教室の中を盗み見る。

教室には数人の生徒がまばらにいて、教室のどこかで固まって話しているそぶりはなかった。

\*\*\*

## 衛宮家居間

「…ということがあったんだ。」

「私にはよくはわかりませんが、随分と棘のある話をしているんですね。シロウの学校は。」

「いや、Cの奴もAの奴もBみたいに殺伐としてるわけじゃ…」

学園から帰ってきた士郎を迎えたのは腹を空かせた同居人こと聖杯戦争で士郎の

サーヴァントとしてコンビを組んだセイバーだ。今のところ、解決していないこと

(不屈の闘志で復活したはた迷惑な虎聖杯のこと)があり彼女は今の現代にその身を置き続けている。

「ふむ。なかなか難しいものですね。」

「ああ、本当にな。」

セイバーはシロウの話に耳を傾けながら茶菓子を摘み、シロウはのどが渴いたので煎茶を

淹れて一口啜る。そのお茶は普段より幾分安い煎茶だけどなかなかおいしかった。

そしてお茶に和むとなぜだか昨日ずっとこけた突鎧天利の事を思い出すシロウ。

でもお茶を飲んだら不思議と突鎧のことは忘れていた。

ところ変わってそして時間が巻き戻って丁度十二時ごろの突鎧家

「おばあさま、コレは一体なんですか？」

「ああこれはね、あの人が骨董品店で買ってきた杖だったと思うわ。」

「杖、ですか。」

「そうね。たぶん杖だと思うわ。」

なにぶん、夫の趣味は私には分かりませんでしたからねえ。

と微笑むおばあさまの声がその時はすごく遠くから聞こえてくる気がしました。

天利が目を覚ました頃にはすでに昼を回っていて、痛む足を庇いながらも慌てて

自室から降りてくると居間でランチタイムを楽しむお年を召した老婦人がいた。

その人は、天利を保護してくれた血の繋がらない彼女の祖母突鎧清音（きよね）

「清音おばあさま、おはようございます。」

「あら、おはよう天利ちゃん。怪我の具合は大丈夫？」

「まだちよっと……」

「あらあら。それなのに無理して降りてきてしまったのかしら？駄目ですよ無理をしては。」

治るものも治りませんよ？と窘める祖母に素直に謝る天利はふといつも祖母と仲良く

一緒にいるはずの祖父の姿が見当たらないので首をかしげた。

「あれ？天地（あまち）おじいさまは何処へ？」

「天地さんなら丁度一時間前ほどに新都の骨董屋に品物をとりに出かけましたよ。」

「また珍しい物でも見つけたんでしょうか？」

「そうかもしれないね、あの人が持ち帰るものはいつも不思議でいっぱいですものね。」

怒った様子もなく、ただ思い出し笑いをする血の繋がらない祖母に昔見たSFアニメの

宇宙警察（キャラクターは若かった）を幻視した。でも一応ここはFateっぽい世界だから

そんなものは無いと思いたい天利はすぐさまその幻視を振り払いキツチンへ足を運ぶ。

そして彼女は布にくるまれた少々ゴツゴツした棒状の何かを見つけ、手に取った。

「おばあさま、コレは一体なんですか？」

「多分、杖だったと思うわ。私にはあんまり詳しく分からないけど。」

「いいえ！私はただの杖ではありません！宇宙の平和を乱すため、いえ！守るため」

愛と正義の使者を捜し出しておもしろおかしく、いや、皆が皆平和に暮らせるように！」

棒状の何かから発せられる台詞。これは手に持つと勝手にしゃべり出す不良品のおもちゃ

なのかと天利は思うが、突然もぞもぞと棒状の何かは布から這い出して

『私はこのへと降臨したマジカルルビーちゃんEXです！一緒に世界を守るため、

魔女っ娘因子を持つ人たちを探しにいきましょう！選ばれた戦士よ！』

キラキラ光る謎のオーラでおもちゃっぽい何か表情豊かに動き出しました。

(……なんか　っていつてるなにあれこわい。)

なんか杖？なのにドヤ顔してるように胸を張ってるっぽいポーズのマジカルルビーちゃんEXに

天利の危険信号は大音量で彼女の頭に響いた。

「最近のおもちゃはすごいねえ？」

「清音おばあさま、あれおもちゃって言ったら他のおもちゃ全部不思議なアイテムですよ。」

「あらそうなの？」

「というかあんなの、ここにあるのがおかしいくらいです…！」

突然のことにただただのんびりとあんまり驚いてなさそうな祖母に天利はコレは危険だと

諭してみるが、相手の反応は曖昧で、自分一人でこの変異を対処するのかと天利は一人  
絶望しているなんて祖母の清音は分かっているだろう。

『…さあ！私を手にとってください世界の余りっ娘さん！』  
「!？」

午後の日差しが少し傾いた頃、突鎧天利の住む家で強い魔力が爆発し  
3度目の復活を果たしたどこかにある虎聖杯がよりいっそう虎柄を  
輝かせて

主要人物の知らぬ間に第三回虎聖杯戦争が始まっていた。

なんて、一番早く知るはずだった藤村女史が弟子のロリブルマとそ  
れを知るのは  
まだ先の話。

in魔法少女つばいBGM

『次回！イヤよイヤよも好きのうち！諦めてください余りっ娘さん  
！一緒にハジけて

さっぱりしちゃいましょう！』

「何でわたしなんですか！？原作にいないわたしじゃなくて、現役  
カレイドルビーさん

捕まえてくればいいじゃないですか!？」

『それはそれでいいけどさっぱり3度目は別のスタートから始まら  
ないとおもしろみがないでしょう!？』

「いやです！わたしは、モブからはみ出したいくないんですー!!」  
『なにをいまさら(笑)』

追いかける魔法の杖、逃げる自称モブ子のシユールな追いかけつこで始まる物語。

さあ賽は投げられた。

聖杯を手に入れんとする者たちよ、

これは今魔法も神秘も関係あらず、

どんな者でも参加できる。

願いを叶えたいものはこそって参加せよ。

ここに第三次異回虎聖杯戦争を開催する！

Out魔法少女っぽいBGMが消えた頃どこかの大型掲示板サイトに誰かの書き込みがあったとかなんとか。

登場しない娘の二日間<sup>3</sup>（後書き）

とりあえず最後は精一杯かっこよくがんばったつもり、です

## 目撃した娘達の大禍時（前書き）

突鎧さんは冒頭部分だけ登場します。

## 目撃した娘達の大禍時

「魔力の塊が、目の前を横切ったんだあれもしかしく「じゃんけん死ねえ！」へぶあつ!？」

「見えない存在感のある何かが、猛スピードで商店街を通過した。」  
「その先を今にも泣きそうな顔の女の子が必死で走っていったよ。」

それは異変を感じた人間がそれとなくその現場周辺を聞き込みに戻ったときの話。

一部一般人とは別な事を話す相手はその人間にシメられていたのはきつと気のせい。

突鎧家で起こった異変にあまりは痛む足に鞭打って（にしては随分と元気そうだった）

自宅にいる祖母を巻き込まないためにもどこか遠くへ走り去っていく。

その後を『お待ちください新しい魔女っ娘さーん!』と魔術師なら確認できる杖が一般人

でもなんか通ったと分かる程度の存在感を醸し出しながら飛んでいく。もはや一般人の

目に触れてはいけないタブーなんて存在しないかのように神秘は弾丸となって天利を追いかけ、

その追いかけてこをさらに追うように夕暮れが街を包み始めた。

突鎧家の自宅で異変が起きる一時間と30分前

穂群原学園弓道部前

あれから、遠坂凜は特に何か変わることもなく放課後まで学校にいた。

そして気がつくと、弓道部まで彼女は足を運んでいて自覚もなしにここへきてぼーっと

していた彼女は程なくしてこの弓道部の部長美綴綾子に見つかった。

「あれー？遠坂。どーしたの今日は弓道部休みだよ。」

「こんにちは美綴さん。…今日はどこもお休みなのね。」

「ん？なーにそれ。気になる言い方するね。」

「別にたいしたことじゃないの。」

話に食い下がってきた美綴に凜は手をひらひらさせて適当にごまかした。

それでもおしえろーおしえろーと繰り返す美綴に鬱陶しそうにその綺麗な眉を顰めた凜は

こちらを”視ている誰か”に気がついた。

(……………?)

相手はこちらが向こうの存在に気がついたというのに、逃げることも引くこともなく

ただ凜一人を視ている。向こうから感じるのは敵意などではなく、何故か羨望の眼差し。

「ん、遠坂？」

「あつ…ごめんなさい何でもないわ。ただちょっと誰かに見られてた気がして。」

「あはは。なんだそんなことか何を今さらいつてんのさアンタは、学園で知らない奴はいないアイドルでしょーが。…理由はともあれ」

最後の台詞は凜には聞き捨てならないものだったがそこは敢えて無視して「それもそうね」とだけ返した。

美綴の言う理由はこの前のアレしかない。忘れもしないというか冬木市民全員の記憶に残っているのが

心底我慢出来ない問題のアレ…年齢を考えたって恥ずかしい平行世界の自分と戦った認めたくない自分自身ことカレイドルビー……。

「正直アレのせいで穂群学園アイドル地位をさらに加速させたよーなもんよねー遠坂は。」

「う、うるさい！そんなの言われなくても分かってるわよ！？&#x2D;とうかさつき自重したのになんでわざわざ

言い直すのよ!？」

「猫かぶりする遠坂の化けの皮が剥がれる瞬間が見たいから。に決まってるでしょー?」

美綴の台詞に見事にペろりと猫から鬼へ変貌した凜の様子を美綴はしてやったりとニンマリ笑い、

分かっててもつい反応してしまった凜はうがー!と怒った。このどうみても女子同士のじゃれ合いを目撃した運のいい人奴はこう語る。

「凜ちゃんprprprwwww」

「マジモン見られて幸せでしたwwww」

「神様ありがとう俺たち名無しだけど今最高に幸せです!wwww」

……とりあえずまた穂群学園一のアイドル遠坂凜のファンが増えらしい。もう視線を感じない凜は息を切りながら見送る美綴に適当に挨拶をして家に帰るため、正門へ足を運んだが…

「何よこの騒ぎは。」

わらわらと穂群原学園の正門は生徒先生の隔てなく集まった人々で外へ出られなかった。

何度も人の垣根を越えて行こうとしても、人々は行く手を阻む。わいわいがやがや。

彼らは何故こんなところで立ち止まっているのだろうか？

「……………。どう言ってもどきそつにないわね…………。」

押しても引いてもわいわいがやがやびくともしない群衆に頭を痛める凜は

「あ、ね…遠坂先輩。」

同じように立ち往生している一年生…自分の妹に。とはいえ学園にいるときは二人は

遠坂家と間桐家に分かれて生活してはいるけれど。

「あれ？桜じゃない。今日は衛宮君と一緒にじゃないの？」

「いえ、今日は弓道部に寄っていたので、先輩とは別行動なんです。」

「ふうん。そうなの。じゃあ衛宮君が帰るまではここに人だかりは

出来てなかった事かしら。」

「ええ。陸上部の人とかがいたくらいです。」

「そっか。」

どうやら桜は約30分くらいは立ち往生していたようだった。

「ねえ桜。」

「なんですか？」

「ちよつとあつちで話さない？」

少し考えた後、凜は桜を誘って二人は人混みから離れ校庭と通学路を隔てるフェンスまで移動し、人混みが無くなるまでの間姉妹の会話を楽しんだ。

\*\*\*

わいわい、がやがや

「人混みなかなか散らないわね。」

「…そうですね。」

一時間くらいたったか。正門に集まった人々は未だに減るところか一人二人と増えているような気がしてならない。なんの集団なのかとか、早く帰りたいと思う二人のイライラは募るばかり。

正門に行けないのなら弓道部の裏門へ行けばとは普通考えつくのだ

が、正門の光景に二人は目を離さない。

そろそろ時計は16時40分を指して暗くなってきた。

「だめ。もう我慢出来ないわ。」

「え？姉さん何をするつもりですか？」

「決まってるでしょ！あそこにいる奴ら吹っ飛ばしてくる！」

「ええっ！」

いい加減我慢の限界に来た凜は立ち上がり自分の鞆を桜に預けて人混みへと駆けていく。

桜の静止も聞かずに、だ。その背中をただ送った桜には酷く気持ちの悪い違和感を人混みに感じて

「ちょっとそこ！通行の邪魔だからどいてくれないかし」

凜が人混みの一番外側にいる人間の肩に手を掛けた瞬間、その違和感的中したのを知り叫んだ。

「だ、だめ！姉さん危ない！」

「へ？」

酷くまぬけな反応をする凜の目の前で、正門の近くに集まっていた人間がすべてぐずりと崩れて消えた。

あかい、あかい、人の形を残さず塊になって、どろりと溶けて跡形もなく。

一時間も前は人間を触ってもびくともしなかったのに、音もなく彼

らは凜の手のひらに

あかいものをひとかけら、それだけ残して消えさった。

## 目撃した娘達の大禍時（後書き）

お話の設定で遠坂間桐間の姉妹の仲は普通となっています。  
恋愛面での関係もわりと普通です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3060z/>

---

モブ子がゆく。

2011年12月11日19時49分発行